

---

FAIRY TAIL **鍵の物語**

こーこうせい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FAIRY TAIL 鍵の物語

### 【Nコード】

N7481X

### 【作者名】

こーこうせい

### 【あらすじ】

島から異世界へ飛ばされたソラ。

ついた場所は魔法の世界！！島へ戻る方法を探すためにフェアリーテイルへ！！

ソラは無事島へ帰れるのか！？

あくまで予定ですが、たぶんKH方面はほとんど進みません。悪しからず。

## 第一話 火竜（前書き）

どもども！こーこーせいです！！

もう一個の話が半分シリラスならこっちはハイテンションで！！

注意点！

(1) 自己解釈大有り

(2) 矛盾点MAXな気がしますです。

(3) クロスオーバーですがほぼKH要素は皆無！！リク？カイリ？きつと元気さ！！

こんな感じですがよろしくお願いします！

無理な方は回れ右！！で、よろしくです！！

この間までネタばれみたいになっちゃったのは秘密！！今回が本編です！！

## 第一話 火竜

「あ、あの、お客さま？だ、大丈夫ですか？」

「あい！いつものことなので」

そこには列車に乗った桜色の髪の男と青い猫がいた。

男は今にも吐きそうな顔をしている。いわゆる乗り物酔いだ。

「無理！！もう二度と列車には乗らん……」

「情報が確かならこの町に火竜サラマンダーがいるはずだよ。いこ」

「ちょ……ちょっと休ませて……」

「うんうん」

男の話をほぼガン無視して先に進む青い猫。

猫は一度も後ろを振り返ることもなく先に列車の外へ出た。そして後ろを見て男がいないことを見て一言。

「あ、発車しちゃった」

遠いところから「たすけて」と聞こえた。

## 魔法

それは人々の生活に根付き、かけがえのないものになっている。その魔法を使い職業とするものたちを人々は『魔導士』と呼ぶ。

魔導士たちは皆『ギルド』と呼ばれる場所に所属する。魔導士達はギルドで働きやっと一人前といえるのだ。

第一話 『サラマンダー  
火竜』

「ええ〜っ！？この街って魔法や一軒しかないの？」

「ええ、元から魔法より漁業が盛んな街ですからね」

そこにはいかにも今風な格好の女とかにも魔法！って感じの男。  
女の名前はルーシィ。魔法を求めいろいろな街を旅しているようだ。  
今いるのはハルジオンという、港町。元来から漁業が盛んでその名前は全世界に轟いている。

5

「はあ、無駄足だったかしら？」

「まあまあ、そう言わずに見てってくださいな！新商品だってちやんとそろってますよ？女の子に人気なのはコレ！色替カレース！その日の気分に合わせて服の色をチェンジ！ってね」

「持ってるし。私は門ゲートの鍵の強力なやつ探してるの」

「門ゲートかあ……めずらしいね！」

新商品といえど、ほんとうにこの街は魔法には疎いらしい。新商品といっても1シーズン前のもののようなようだ。しかしそんな街の魔法屋ルーシイは掘り出し物(?)を見つけたよ  
うだ

「あ！ホワイテ下キー白い子犬！！」

「そんなのぜんぜん強力じゃないよ？」

「いいのいいの！コレ探してたんだあ！！」

それは門の鍵のなかでも最下層とっていいレベルのものだが、今  
人気でなかなか手に入らない物だった。  
ルーシイはそれを買うことに決めたようだ。

「おいくらかしら？」

「2万」

あつれー？よく聞こえなかったなあ？

「お・い・く・ら・か・し・ら？」

「だから2万」

あまりにも高い値段にルーシィは最終手段、最終兵器を使うことにした。

自分の自慢の胸のソレをギユムツと押し上げ、誇示するように見せつけ、色っぽい声で

「おいくらかしら？素敵なおじ様？」



魔法屋の親父は眉一つ動かさなかったそうなの。

「ちえー！！1000Jしか負けてくなかった！！私の色気は1000Jかーっ！！」

憂さ晴らしに近くのカフェの看板蹴ってみた。周りを気にしないでやっちゃったから周りの人が見てる！恥ずかしっ！！

とは思いつつも後悔はしていないルーシィだったりする。

そんなことをしながら町を歩いていると前方に人だかりができているのが目に留まる。

「なにかしら？」

そう思い人だかりに近づいていく。

「この街に有名な魔導士様が来ているんですって!!」

サラマンダー  
「火竜様よ　っ!!」

サラマンダー　サラマンダー  
火竜!?!火竜っっていうと

「あ、あの店じゃ買えない魔法を操るって言う……この街にいるの  
!?!」

魔法に関しては目がないルーシィ。すぐさま人だかりのすぐ近くま  
で。

「へえーすごい人気ね……」

きつとすごい魔導士なんだろう!

そう、期待を胸に抱き覗く……

訳ではなく

「かっこいいのかしら？」

結局は年頃の女の子のようだ。

「列車には2回も乗っちゃまし」

「ナツ、乗り物弱いもんね」

「腹は減ったし……」

「うちら金ないもんね」

二人組み（？）のグループが街を歩く。

桜色の頭をした男がナツ、隣にいる青い猫がハッピー。

「なあ、ハッピー。火竜サラマンダーってのはイグニールのことだよなあ？」

「うん、火の竜なんてイグニール以外思い当たらないよね」

「だよな」

ナツたちは火竜サラマンダーを求めこの街に来ているらしい。

「やっと見つけた！！ちょっと元気になってきたぞ！！」

「あい！！」

イグニールというのはナツの育ての親。今はナツの元から離れてしまっていて行方不明になっている。ナツはイグニールを探しにハルジオンへ来ていた。

そして噂をすれば影、目の前には「火竜さまサラマンダー！！」と叫び声が。

「ほら！！噂をすればなんとらって！！」

「あい！！！！」

人だかりへ目指す一人と一匹。目的は近いようだ。

ドキッドキッドキッドキッ！！

な、なんなのこのドキドキは？あたしってばどうしちゃったの？

人だかりの中に入り火竜をサラマンダー一目見て十秒弱、ルーシイは謎の緊張感に蝕まれていた。

ちょ、ちょっと！！あたしってばどうしちゃったのよ！？

ルーシイの方を火竜が視線サラマンダーを向けるだけで……

はうう！！！

謎のトキメキ。有名な魔導士だからなのか、それとも本当に……  
そんな謎を頭に残しながら自分の欲望のまま火竜サラマンダーに近づいていく。

そんなところに

「イグニール！！！」

そんな声が響き、ルーシィは我に返る。

あれ？私今……！？もしかして、魔法にかけられてた！？

そして声を出した本人はというと。

「誰だオマエ」

呼んでおいて明らかに失礼なことをしていた。

「なんだアイツは？」

自分を火竜サラマンダーと言う男は自分の魔法に乗ってどっかに飛んでいった。  
そしてその代わりに現れたのは

「さっきはありがとうね」

金髪の女の人だった。

- - - - -

あのとさっきの女の人、ルーシィに「御礼をしたい」ということでナツ達は飯を食いに来ていた。  
そしてその飯に誘った本人はというと

「でね？でね！？ギルドって言うのは……」

店に入ってからずっと喋りまくっていた

「ほ、ほおか……」

「よくしゃべるね」

圧倒されるナツとハッピー

自分の話したいことはすべて話したようで、ルーシィは話に火と区切るをつけるところちら（の世界）に戻ってきた。

「そういえばあんた達誰か探してたみたいけど……」

「あい、イグニール」

「サラマンダー火竜がこの街に来てるって聞いたか来て見たはいいけど別人だっ  
たな」

「サラマンダー火竜って見た目じゃなかったんだね……」

「見た目って……人間としてどうなのよ？」

「ん？人間じゃねえよ？イグニールは本物の竜だ」



「……………!!!?」

普通の会話から生まれる突然の真実。そこには会話についていけなくなったルーシィの姿。  
かろうじて復活して言った言葉は

「そんなの街中にいるわけないでしょー!!!」

全身全霊の突っ込み

ピクッと反応するナツたち

「今気づいたって顔すんなー!!」

その後もしばらくレストラン内は騒がしかった。

レストランからでたルーシィは少し休憩がてら公園のベンチに腰掛け、毎週欠かさず読んでいた週刊ソーサラーを読んでいた。

「あはははは！……やりすぎー！！」

そこには自分が入りたいギルドの特集が。しかしそこにはギルドで起こった問題ばかり。正義の味方のようなギルドがコレでは悪役に見えるといったほどの内容だ。

「魔導士ギルド、妖精の尻尾！！最高にかっこいいなあ！！」

しかし問題などルーシイには関係はない。ルーシイはただ単に妖精の尻尾に入りたかった。そんなところに一人の男の声

「へえ、君、妖精の尻尾に入りたいんだ」

「あ、あんた！！<sup>サラマンダー</sup>火竜！！<sup>チャーム</sup>いっておくけど私に魅了は効かないわよ！！」

そこにはさっき問題になった<sup>サラマンダー</sup>火竜。

「いいんだ、君を今日の船上パーティに招待したくてね。君さえ来てくれればいいんだ」

「行かないわよ！！あんたみたいなえげつない男のパーティなんか！！！」

「でも、君妖精の尻尾に入りたいんだろ？」

パーティの話を断っていたのに、何を言い出すんだ、といった調子のルーシィ。しかし妖精の尻尾という言葉が出た途端に顔が変わった。

「妖精の尻尾の火竜サラマンダーって、聞いた事ない？」

「ある！！あんた妖精の尻尾の魔導士だったの！？」

「そうだよ。入りたいならマスターに話し通してあげるよ」

目の前の男にパーティへ誘われる。その男は妖精の尻尾だった。行くしかない！！

上のような回路が形成されるまで約0・1秒。ルーシィはさっきまでの態度とは打って変わって

「素敵なパーティになりそうね！！」

完全に男の虜に。

妖精の尻尾のことを聞き、船上パーティーへ行くことにした。これから起こることも知らず、ルーシィは有頂天だった。

「はっ！！！擬似魅了チャームはいつてた！！」

## 第一話 火竜（後書き）

いかがでしょうか？こんな感じで続けていこうかと思えます！！  
誤字、脱字、感想などはバンバンお願いします！！これから改善し  
ていきたいんで！！

では、よろしくお願いします！！

## 第二話妖精の尻尾（前書き）

無駄になげえ W W W

まあ、こんな感じにソラは絡ませていきますよ〜

もちろんはーとれすは登場させますし、途中から成長させます W W

エ

誤字脱字、感想はどんどんお願いします!!

## 第二話妖精の尻尾

夜……

ふらふらするし……正直ちょっと酔いそう……酔う？あれ！？俺って変な黒いやつらに襲われて、玉に飲み込まれて……！！？  
目を覚ましたソラは周りの景色を見て驚いた。自分が知らない景色、匂い。そして

「なんで船の上？」

どこか知らない船の上にいる。

ここは船尾の方のようで人は誰もいない。扉が一つあるだけだった。

「どーすっかなあ………」

いくらなんでもどこか分からない上に、船から飛び降りるわけにも行かない。

「まあ、見つかったら事情話せばいいか」

と、いうことで中に入ることにした。

「ルーシイか……いい名前だね」

「どおも」

そこには<sup>サラマンダー</sup>火竜とルーシイの姿。どうやら<sup>サラマンダー</sup>火竜に気に入られたようでルーシイは別室に呼ばれている。

他にもパーティに呼ばれた女の子達はいるのだが、皆甲板でおしゃべり中。

ま、妖精の尻尾に入るまでこいつに愛想よくしてればいいんだけどね！

「まずはワインで乾杯という。口をあけてごらんゆっくりと葡萄酒の宝石がはいってくるよ」

優秀な魔導士、さらにイケメンの部類に入る<sup>サラマンダー</sup>火竜。そんな人に言い寄られる姿は羨まれるだろう。

しかしルーシイどっちかって言うと物事をはっきりするタイプ。簡



単に言つと、ロマンとかはあまり興味がなかつたりする。だからこの状況お

うっざあーーーー！！！！！！

とか思つていたり。

しかし妖精の尻尾に入るため。ここは我慢、と口をあけた。

しかしルーシィは寸でのところでソレを振り払つた。

「これ、睡眠薬よね。どういうこと?」

そう、このワインには睡眠薬が入っていた。

「ほっほーう。よく分かつたね」

「勘違いしないで。私は妖精の尻尾に入りたいただけであんたの女になるつもりはないわ!」

しかしそうしたことが運のつき。

「しょうがない娘だなあ…素直に眠っていれば痛い目みないですんだのに」

「え？」

口元をいやらしく歪ませた火竜<sup>サラマンダー</sup>。その視線の先には

「さっすが火竜<sup>サラマンダー</sup>さん」

「こりや久々の上玉だな」

屈強な男達が。

「あんた達何!?!」

「ようこそ、奴隷船へ。他国につくまでおとなしくしていてもらうよお嬢さん」

ルーシイは騙されたことに気づいた。

「これが、妖精の尻尾の魔導士か!?!最低じゃない!?!」

そんな叫びはむなしく響くだけだった。

「あれ？誰もいない」

船室内に入ったソラはつぶやいた。

そこには誰もいない空間と先に見えるカーテン。

「どうしよう？カーテンの向こうには絶対誰かいるよな……」

カーテンの先には揺れる影がある。あそこを通れば絶対に誰かに会うだろう。

「まあ、いくしかないか。どっちにしろここがどこか知りたいし！」

と、言うことでカーテンの先に進んでみると……

「いやあああ！！」

目の前に広がるのは、なぜか男達に羽交い絞めされている女の人。そしてそんな女の子にあつそーな棒を押し付けようとしている男。え？どーゆーこと？……じゃない！助けなきゃ……！

ソラは自分の状況も考えず男達を止めに入った。

「おい！何やってるんだよ！」

「！！！？ガキ！どっから入った！！！」

「ガキじゃない！ソラだ！！！」

「オマエ、コレを見たからにはただじゃ帰さねえぞ？」

……あれ？これちょっとマズくない？  
無計画で飛び出した自分に後悔した。

「お前ら！やっちまいな。ただ、顔はやめとけ？ボディ体にしとけよ？」

迫り来る男達。肉の壁ソラはコレで終わりか……と、思い、手を前に突き出し交差させる。

「しゅがぁー！！？」

「へ？」

なぞの叫び声に気づき前を向くと吹き飛んでいる男一人と、手に握られている鍵キブレードの剣。島でも役に立ってくれた自分の獲物。ラッキー！！ここでも使えるのか！！

獲物を手にしたソラは口元を軽く歪ませニヤリ、と笑った後、女の子を羽交い絞めに行っている男達に襲い掛かった。

「ほっ！！はっ！！」

「くそ！コノガキがあ！！」

軽いフットワークで男達を倒していくソラ。そんなソラに向かっている男達は右往左往している。島で鍛えられたフットワークは役に立っているようだ。

しかし相手が相手。何人もいる男達に一人で戦うには無謀すぎる。戦力差は一目瞭然だ。

だからソラはつかまっている女の人の近くの男達だけを倒して

「お姉さん！逃げよう！！」

「わっ！！！？」

女の人の手を引っ張り甲板へ飛び出した。既に離陸している船なため逃げ道は海だけだ。

「お姉さん！泳げる！？」

「泳げるけど…」

逃げようとしているソラたちに火竜サラマンダーが声をかけた

「おいおい、逃げ場はもうないぜ？それとも海に逃げるか？こいつらを放つて、自分だけ？」

ここにはルーシィ以外にも何人も人間がいる。そんな人たちを放つておけないソラたちは逃げることを断念して火竜サラマンダーのほうを向いた。

「あんた達卑怯よ！！」

「そりゃ、悪役だからな。ほら、おとなしく部屋に戻れって」

そうして火竜サラマンダーがソラたちに近づく。

戦うことは不可能、逃げることも封じられ、もうだめか…

そう思った二人

しかしそんな二人の目の前に

ズッシイン！！

救世主が現れた。

時間少しさかのぼり船上空

「ナツ、あそこだよ」

「おう……でもなあ……船の上かあ……」

「ごちゃごちゃ言わない。妖精の尻尾か確かめるんでしょ？」

「おう……ウプツ、想像しただけで酔ってきた……」

「思い出すだけで用のやめようよ。ほら、降ろすよ」

「……うし！背に腹は変えられねえ！いくぞハッピーー！！」

「あいー！！」

ハッピーに体を離され落下するナツ。ナツは派手な音をたてながら船の上に着地し、

酔いで甲板に突っ伏した。

「ルーシィ……と、誰？はなにやってんの？」

「ナツ、ハッピーー！！？」

ルーシィが空を見上げるとそこには昼間会った二人組み



なんでこんなところに!?

「細かい話は後っぽいね。いくよ、二人とも」

「「えっ?」」

ハッピーは二人を抱えて空に飛び出すと、空高く飛び上がった。

「あの女を逃がすな!! 評議員に通報されると厄介だ!!」

「へ、へい!!」

甲板からは明らかに不穏な会話。

そして銃を取り出し、こちらに撃ってきた。

「きゃあ!!」

「うわあ!!」

思わず頭を抱えるルーシィとナツ。そんなところにハッピーから声がかかる。

「ねえ二人とも」

「なによ？」

「やっぱり二人は無理」

二人を抱えたハッピーごと海に落下した。

「クソネコー！！！！」

「うっそおお！！」

ルーシィとソラの声はむなしく消え去った。

つたく、あんなのが妖精の尻尾だったなんて……っと、ソレより女の子達を助けないと…

そういつて自分の鍵を探すルーシィ。

一方ソラはどこかへ泳いでいくルーシィを傍目に、おぼれかけていたハッピーを救出した。

「大丈夫か？」

「あい」

ハッピーを救出して数十秒後、ルーシィも海から頭を出す。そして

「開け！宝瓶宮の扉！アクエリアス！！」

そう叫ぶ。すると海から瓶を持った人魚が

「「すっげええええええ！！！！」」

目を輝かせるソラとハッピー。

「私は星霊魔導士よ。門の鍵を使って異界の星霊達を呼べるの。さあ。アクエリアス！あなたの力で船を騎士まで押し戻して！！」

しかし星霊アクエリアスは

「ちっ」

「ちよつとお！？今『ちつ』て言ったかしらー！！！？」

どうやら関係は良好ではないようだ。

アクエリアスによって生み出された大波は、とんでもない力で船を岸に押し戻した。  
ルーシイたち諸共。

「ばかあああ！！！」

ルーシイの声はむなしく消え去った。

「ナツー！！だいじょ……！！！」

岸に戻り再度船に入り込んだルーシイは目の前に広がるその光景に驚く。

数十人の男達がナツを取り囲むように立っていた。

「小僧……人の船に勝手に乗ってきちゃイカンだろお。あ？それにさっきのガキ、オマエもだ」

「俺っ！？」

ソラは驚きの声を上げる。しかしナツは何も返さず、黙って上着を脱いだ。

「オイ!! さっさとつまみ出せ」

「はっ!!」

サラマンダー  
火竜の指示に二人の男がナツに歩み寄る。

「いけない! ここはあたしが……!!」

飛び出そうとしたルーシィをハッピーが制す。

「大丈夫、ナツも魔導士だから」

「えっ?」

ハッピーの声にルーシィは驚きの声を上げる。  
ソラに対しソラは疑問の声。

「魔導士って?」

「ほら、さっき私が星霊をよんだでしょ？そういつことができる人たち……ってあんたなんで知らないのよ！？常識でしょ！？」

「いやあ……あはは、まあ、後で話すよ」

話すと長くなりそうなので後で話すことにした。

「お前が妖精の尻尾の魔導士か？」

「それがどうした！？」

「よおくツラ見せろ」

二人の男がゆっくりナツに近づく。そして顔を一瞥したナツは二人の男を纏めて殴り飛ばす。

「オレは妖精の尻尾のナツだ！！オメエなんか見たことねえ！！」

「なっ！！！？」

「え？妖精の尻尾！！？ナツが妖精の尻尾の魔導士！！？」

ルーシイも驚愕する。しかしナツの肩には自分が大好きな紋章、妖精の尻尾のシンボルが。

「な……！あの紋章！」

「本物だぜボラさん！！！」

「バ……バカ！その名で呼ぶな！！！」

サラマンダー  
火竜……もといボラがうるたえる。

「ボラ……プロミネンス紅天のボラ。数年前『タイタンノーズ巨人の鼻』って言う魔導士ギルドから追放されたヤツだね」

「あ、知ってる！！魔法で盗みを繰り返してて追放されたって言う魔導士！！！」

ルーシイも知っているようだ。

ソラは何のことが分からなかったが

「とにかく、悪者ってことだな!!」

「そう!」

悪者ということとは理解したようだ。

「オメエが悪党だろうが善人だろうが知った事じゃねえが、妖精の尻尾を語るのには許さねえ」

「ええいつ!!ゴチャゴチャうるせえガキだ!!!!」

ボラは得意の魔法、日の魔法をナツに放つ。  
ボラが放った炎に包まれるナツ。

「ナツ!!」

「危ない!!!!」

助けに入ろうとするソラとルーシィ。しかしソレをもハッピーは制した。

「ナツに火は効かないよ」

目の前には

「まずい。こんなにまずい炎は初めてだ。オマエ本当に火の魔導士



か？」

ボラの放った火を『食べる』ナツの姿。

「『『『『『『はあ！！？』『『『『『」

ハッピーを除く他全員の驚きの声。

「ふー…ごちそう様でした」

「な…なな…何だコイツはー！！？」

「火…！！？火を食ったと！！？」

火を食べたナツは、口元を歪ませると

「食ったら力が湧いてきた！！いくぞおお！！！」

ボラたちに襲い掛かった。

「ボラさん！オレもコイツ見た事あるぞ！！！」

「はあ！！？」

「桜色の髪に鱗みてえなマフラー…間違いなエ!!!コイツが…本物の……」

ドゴオオオオオオン!!!!!!

そこから先は言う事は出来なかった。理由は簡単。ナツの炎に吹き飛ばされたからだ。

「サラマンダー火竜……」

ボラの部下の言葉を受け継ぐように続けるルーシィ。  
ナツはというと…

「よく覚えとけよ。これが妖精の尻尾の……」

拳に炎を纏い、ボラに向かって全力で……

「魔導士だ!!!!!!」

殴りつけた。

ボラは吹き飛び、船外へ。

ナツもそれを追いかけて、他のやつらをもぶつ飛ばす。

「オラララララアアー！」

すごい…すごいけど……

「やりすぎだあー！！！！（よおー！！！！）」

大暴れするのを見て泣叫ぶ（？）ソラとルーシィ。

「あい！！！！」

元気に答えるハッピー

「『あい！！！！』じゃないわよ！！！！ほら！！！！軍隊！！！！」

騒ぎを聞きつけた地方の警備隊が港へやってきた。

「こゝこの騒ぎは何事かねー！！！！！！」

その言葉を聞いてか、一暴れして返ってきたナツは

「やべー!!逃げんぞー!!」

ルーシイの手を持って走り出す。

「なんであたしまでえー!!!?!?」

「だってオレたちのギルドに入りてえんだろ?」

「っ……!!」

「来いよ」

ナツがルーシイに笑いかける

「うん!!!」

ルーシイは元気よく返事をして、ナツの後を追いかけた。

「あ、待ってよ!!俺も行くって!!」

ソラもそんなナツを追いかける

が、

「おめーは、誰だああ！！！！」

「ぶじっ！？」

ナツによって殴られ意識消沈。

「ちょっとー！！！！この人は私を助けてくれた恩人なんだからーっ！！！！」

「え？」

急いで気を失ったソラを担いで全員逃げ出した。

逃げる二人と一匹の顔はなんともいえない微妙な顔だったという。

## 第二話妖精の尻尾（後書き）

うん。長い割りに内容がない。

まだ漫画1話分ですよ……終わるのかな？コレWWW

## 第三話ギルド（前書き）

まあ、序盤って事もあってそこまで進展はないです。  
もうそろそろオリジナルストーリーリー入れていこうかなあっておもっ  
てます。



## 第三話ギルド

「ただいまー！！！！！！！！！！」

「ただー」

「うわぁ、おつきーい！！」

「えっと…こんちは！！」

三者三様全員異なるあいさつをして妖精の尻尾へ。

「あ、ナツ、ハッピー！おかえりなさい！」

「おう、ナツ！お前ハルジオンではまたやらかしてって……うづうづ  
！！！！？」

「てんめえー！サラマシター火竜の情報嘘じゃねえか！！！！」

「あらあら、ナツが帰ってくると早速お店が壊れそうね」

「もう壊れてるよ！！！！？」

ワイワイがやがや……

「私、本当に妖精の尻尾に来たんだあ……」

ルーシィはあまりのことに感激中。

ソラは

「騒がしいところだな……」

……ある意味感激中？のようだ。

## 第三話ギルド

えーっと……どーゆうことだ？

目の前に繰り広げられているのは妖精の尻尾のほぼ全メンバー参加の大乱闘。

こうなった理由は……なんでだろ？ここってギルド？だよな？仲間じゃないの？

「ナツが帰ってきたってえ！？」

ナツと一緒にギルド内入って約5分後、ギルドの奥のほうからやまましい足音が聞こえたと思うとそこには……

「てめえ、この間の決着つけんぞコラー！」  
パンツ一丁の男

「あんななんて格好してんのよ。これだから品の無い男は……」

そんな男を止めに入った人は……

「いやだわ」

大きい樽ごと酒をラッパ飲みする女

「くだらん！昼からピーピー騒ぐんじゃねえ」

背中に『一番』と書かれた学ランのようなものを着た

「男なら拳で語れ！！！」

喧嘩馬鹿（しかも速攻玉砕）

「騒々しいな……まったく……」

ホスト崩れのようなイケメン。ルーシィによると彼氏にしたい魔導士上位ランカー。周囲には大人のお姉さん。

「混ぜつつくるねー!!」

結局喧嘩馬鹿(わりと強い)

……………なにこじ。

ココにはまともな奴がいないのか!!というレベルの異常な面子。  
唯一まともな人といえは……

「あらあ？新入りさんたち？」

このギルドの看板娘にして、総長補佐的な立場にいる女、ミラジェ  
ーン

「うつそお？本物！？本物のミラジェーン!？」

ルーシイが慌てるほどの有名人のようだ。

「……………っじゃない!あれ、止めなくていいんですか？」

しかし結局

「いいのよ、いつもの事だから」

「あららら……」

やはり妖精の尻尾のメンバーのようだ。  
止めに入らず傍観。  
すぐ横ではなぜか激化している身内喧嘩。しかも激化はとまらず……

「あんたら……いい加減にしなさいよ！……」

「あつたまキター！！」

「ぬおおおおお！！」

「困った奴らだ」

「かかって来い！！」

魔法を使い始める始末。

ちよつとあ！？コレなんかまずくない？

「ル、ルーシイ！！？」

「魔法！！！？たかが喧嘩に！？」

「ちよつとコレはまずいわね」

喧嘩ごときに魔法を使うなんて……

とはいいつつもソラは魔法をよく知らないのだが、ナツの滅竜魔法、ルーシイの星霊魔法を見ているのでなんとなくではあるが危険性は理解していた。

ギルドメンバーのミラジエーンさえ焦るのだから相当ヤバイようだ。このままじゃこの建物自体が消失するんじゃない？というレベル。一緒にいるだけで肌がピリピリしてくる。

しかしその魔法は使われることはなく静かに、収まる。ピリピリしていたものも消え去った。

「やめんかあ！！馬鹿たれええええ！！！！」

「でか　　っ！！！」

ソラとルーシイが声を合わせて驚くほどの巨人。  
その姿を見たギルドメンバーは全員停止した。ただ一人、ナツを除いて。

「あら、いたんですか？マスター」

「マスター！！？」

ミラジェーンの言葉に再び驚くルーシイとソラ  
マスターってことはココのトップ！！？

「お前らびびりやがって！！この勝負、俺の勝ち！！」

マスターはソラを（遠慮なく）踏み潰すと、こちらのほうを向いた。

「む、新入りかね？」

「は、はい……っ……！！！！？！？」

出てきたのは虫の声。。



「ふんぬう……！」

「……っ……！！！？！？」

マスターが出す声に言葉を失った二人がびくびくしながら成り行きを見守る。否、見ざる得なくなる。正直言つと体が動かない。姿が変わっていくマスターは……

「よろしくね」

縮みに縮んでソラの腰ほどの高さの爺さんになった。

「……っ……！！！？！？」

二人は再び言葉を失った。

「とっ……！」

マスターは某ヒーローのように掛け声を放ち、連続後方宙返り。

「んがっ！？」

結局着地失敗。

「「「「……っ」「」」」」

誰もが笑いをこらえたのは言うまでもない。

ハッピーは……過呼吸起こしてる……？やばいよ……！……あ、ミラに助けられた。

「まーたやつてくれたのう、お前ら。見よ、評議会から送られてきたこの文書の束を」

なんだ！？あの紙束……！評議会？なんだろう？

（なあ、ルーシィ、評議会って？）

（魔導士ギルドを束ねる機関よ。ギルドがやっつてることを見張ってるの）

（へえ……）

うん。よくわかんね。まずギルドって何なんだろう？あとでルーシィに聞いてみよう。

「まずはグレイ」

「あ？」

あ、さっきの変態

「密輸組織を検挙させたまでにはいいが……その後街を素っ裸でふらつき……」

……なんで脱いだ。

「干してある下着を盗み逃走」

「だって裸はまずいだろ……」

いや、まず脱くなよ。

「つぎにエルフマン！！っ貴様は要人護衛の任務中、要人に暴行」

さすが喧嘩馬鹿。保護する意味。それじゃ保護の意味無いじゃん

「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で飲むこと15樽しかも請求先が評議会」

「ばれたか」

おお、さっきの樽女。評議会ってギルドってののトップだよな！？  
何やってんの！？

「次にロキ……評議員レイジ老子の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害賠償の請求が来ておる」

あ、さっきのホスト！あんなに女の人いるのにまだいたのか…

「最後にナツ」

あ、ナツだ

「デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒も壊滅。チユーリイ村の歴史ある時計台倒壊、フリージア教会全焼、ルピナス城一部損害、ナズナ溪谷観測所崩壊により再起不能、ハルジオン港半壊……」

すげえ、ナツだけ異常だ。ナツ危ない。俺もこれから気をつけよう。そついえば気づいたけど、やっぱりココは俺が知らない世界みたいだな。聞いたこと無い場所ばかりだ。

「他にもアルザック、レビィ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ピス力……」

さっき喧嘩をしていた面子が全員ビクツとなる。

……ココの人全員問題起してるのか!!!?

「貴様らあ………」

マスターが再び口を開いた。

周囲の気温が一気に下がった感じだ。ゾワリ、背筋が凍る。

「わしは評議員に怒られてばかりじゃぞあ………」

……すごい威圧感だ。

なるほど、こんなに小さい爺さんがココのトップなわけだ。貴禄つていつのかな？よく分からないけど……うん。みんなの親父って感じ？

「だが……評議員などクソ喰らえじゃ」

え？

マスターは評議員からの始末書を燃やしてしまった

「理を超える力はすべての理のより生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の中の”気”の流れと自然界に流れる”気”の波長があわさり、初めて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力をつかう。いや、己の魂すべてを注ぎ込むことが魔法なのじゃ」

魔法のことが分からないソラだが、この言葉はじっくり聞いていた。理解できたわけじゃない。ただ、感じた。魔法が何なのか、体で感じている。

「上から覗いてる目ン玉気にしてたら魔道は進めん。評議員の馬鹿どもを恐れるな!!!」

「自分の信じた道を進めい!!!それが妖精の尻尾の魔導士じゃあ!!!」

ウウオオオオオオオオ!!!

建物内に歓声が響く。もちろんソラの声も混じっている。ルーシイの声も。

本当にさっき喧嘩をしていたのか!!!  
そう思えるほどの仲のよさ。

笑い声は夜遅くまで続いたという。

「え？じゃあソラって違う世界から来たってこと！？」

「まあ、そういうことになるのかな？」

「すごい、物語みたいね……だけど大変じゃない？この世界のこと  
はよく分からないんでしょ？」

「おう！でも、なんとかやっていけそうな気がするよ！！」

夜

ソラはルーシイとミラ、あとその他モブの皆さんに自分のいきさつ  
を話していた。

ルーシイとも前に話したが、この世界に自分がいた島『デイスティ  
ニーアイランド』はないようだ。つまり本格的に分からない場所に  
着いたということだ。

「でも衣食住はどうするのよ？このままじゃ泊まる場所も無いわよ  
？」

「俺、野宿はなれてるから平気！！」

「野宿って……あ、ナツのところに泊めてもらえば？」

「え？いや、ソレは悪いって」

と、ここでナツがやってきた。

「俺の家？別に来てもいいぞ？俺とハッピーしかいねえからな！な、ハッピー！！」

「あい！！」

簡単に承諾したナツと、元気よく返事をするハッピー

「ほんとか！！？」

「おう！」

「あい！！」

「やったねソラ！」

「ルーシィのおかげだって！よろしくな！ナツ！」

と、言うことではらくの間ナツの家でお世話になることだ。当面の間はお世話になりそうだなあ……。

「そうだ！ソラもギルド入っちまえよ！！」



「え！？いや、でも！俺いつかなくなるかもしれないし！！」

「ならソレまでの間だ！！お前の魔法すげえらしいな！一回勝負して見たいし。それにギルドは家族だからな、寂しい思いしなくてすむぞぉ〜！！」

家族、ねえ。思えば母さんにも会えないんだよな……。それに俺の魔法……。あれって魔法なのかな？そのことも気になるし。入ってみるのもいいかもしれない。あ、あと勝負は遠慮願いたいなあ……。ソラはしばらくうつむき、考える。そして

「……そうだな、せつかく違う世界に来たんだし、楽しむのも悪くないよな！」

「あい！！」

「よし！おれも妖精の尻尾に入るぞ！！」

「よっしやあ！！」

そうしてこの日、ソラは妖精の尻尾の一員になった。

翌日

ソラがナツの寝相の悪さに部屋を出て行ったのは言うまでもない。  
その事を泣く泣く話すソラの顔は、真っ赤に膨れていたという。  
（ルーシイ談）

## 第三話ギルド（後書き）

次回！！

マカオ救出からのあいつ出現。あの変態！！

## 第四話魔法（前書き）

すみません。マカオ救出まだでした。ってか思った以上に魔法の説  
明が長かったです。

あと自己解釈大きく持ってます！まあ、ご了承ください！では、ど  
うぞ！

## 第四話魔法

それは妖精の尻尾の朝

「なあ、結局のところ、魔導士ってなんなんだ？」

「ああ、そっか、ソラは魔導士も分からないんだっけ」

ソラも、今日から魔導士だ。

「えーっと、まず私たちのことから説明するわね。私達のように魔法を使える人、または魔法を使ってソレを仕事としてる人のことを『魔導士』っていうの」

「ふむふむ」

「魔導士たちが使う魔法は人それぞれ。たとえばルーシイの魔法は星霊魔法だから店で買えたりもするわね。あとハッピーみたいな魔法は能力系<sup>アビリティ</sup>。先天性の魔法よ。たまに後天的な人もいるけど」

「……なるほど」

ミラの分かりやすい説明。もっとも、ソラにはほとんど理解できていない。

じゃあ、俺の魔法は何なんだろう？

「あ、だったら俺の魔法は何なんだ？店で売ってそうでもないし、別に昔から持ってるわけでもないぞ？」

「そうね。ソラの場合、珍しい古代<sup>エンシェント・スベル</sup>の魔法っていう魔法ね」

「エンシェント・スベル 古代の魔法ウ？」

「そう。ソラの『キープレード』はナツとかと一緒に。ナツも『滅竜魔法』エンシェント・スベル っていう古代の魔法を使うの。でもこの魔法は本当に珍しいからどんな能力か、どんな力かは誰もわからない。ナツみたいに教えてもらったりしてれば分かるだろうけど、ソラみたいに急に使えるようになった人は自分で開発していくしかないわね」

「そっか……」

うーん…自分の力ぐらいは把握しておかないといけないなあ……。制御できないは危ないしな。

「じゃ、今度はギルドについて説明していくわね。リーダーズ、光ペーン貸して」

「うい」

ミラが次々と”空”に文字を書いていく。

すごい。あれも魔法なのかな？えっと…政府、魔法評議院、地方ギルド、ギルド……力関係かな？

「まず、魔法界で一番えらいのが、政府と繋がりがある評議会……魔法評議院ね。魔法評議員は10人魔いて、法界におけるすべての秩序を守るために存在するの。犯罪を起こした魔導士を裁くのもこ

の機関ね」

あ、昨日ルーシイが言っていたことだ。

巨人の鼻にいたボラもここに裁かれたのだろう。

「その下にいるのがギルドマスター。うちのマスターとかよ。マスターは評議会での決定事項を通達したり、各地方ギルド同士の意志を伝え合ったりして、私達を円滑にまとめてくれたり……まあ、大変なお仕事よね」

へえ……マスターもがんばってるんだな。

と、ここで気づく。コレってマスターの説明……

「結局ギルドってなんなの？」

「うん。ギルドって言うのがその魔導士達が所属する場所。魔導士たちはそこで仕事をもらうのよ。簡単に言えば仕事の仲介所ね」

「ギルドでしか仕事はもらえないのか？」

「もちろん、フリーで働いている人もいるけど、その人はよっぽど情報力に長けていて、実力がある自信家ね。ギルドのいい点は情報が集まることと、信用されやすいから報酬がいいこと。あとは簡単にパーティを組めるから難しい依頼もこなせることかしら」

「……なるほど」



そっか。ギルドにいれば仲間と一緒にいけるんだな。しばらくは一人じゃ無理だし、誰かと一緒に行くのもいいかも。頭の中でこれからの算段を建てていくソラ

「!!って、俺まだ仲間いないじゃん!」

がつくし、とうな垂れるソラ。まだ入ったばかり+この世界のことよく分からないというハンデで誰と一緒に仕事へ行ってくれるか…

しかしそこに救いの声

「あ、ならあたしと組もう?ソラ。あたしもまだ入ったばかりだし、それに一人じゃ心細いから」

「ほんとかルーシィ!!」

やった!と喜ぶソラ。これでどんな仕事もいける(気がする)な!!  
そんなソラの横ではミラがまた何かを書いていた。

「ミラは何かいてるの?」

「みてわからない?」

ええーっと、丸い物体に生える何か……  
これは……!!

「……………ジャガイモ？」

ああ！ミラが泣いちゃった！！！！

「ソラあ……………女の子を泣かせるなんてえ」

ルーシイのニヤニヤした悪そうな顔。腹立つなあ……………

「じゃあルーシイはコレ何か分かるのか!？」

「え?……………ええっと……………山芋？」

「そんな変わらないじゃん!!」

後でミラに聞いたところ、ギルドメンバーの似顔絵だったようだ。少々居心地が悪くなったソラは、視線を明後日の方向に向けた。そ

ここにはテーブルでギルドメンバー達と話しているナツの姿が。

「なあナツ、お前あんなかわいい子どこで見つけて来たんだよお」

「俺のチーム入ってくんねえかなあ……」

下心たつぷりの男達。こんななりでも実力があるから憎めなかったりする。

一方ナツは

「どこ行くんたナツ？」

「仕事だよ。金ねーし」

まじめに働こうとしていた。

「報酬がいい奴にしようね」

「おう！……コレなんかどうだ？」

ナツが手に取ったのは盗賊退治の依頼書。報酬は「16万」と悪くない仕事だ。

そんなナツの程近いところでは、マスターと子供が何かを言い合っていた。このギルドのメンバーの息子、ロメオだ。

離れたところで聞いていたのだがは話の内容はよく聞こえた。

どうやらロメオの親父、マカオが任務に行ったきり帰ってこないそうだ。それも3日。心配になったロメオだったが、マスターはそれを追いつ返してしまった。

「マスター、厳しいんだな」

「マスターも心配なのよ」

ふうん……と一息つくソラ。するとナツのいるほうから

ズドン!!

重い音が響いた。

その原因、ナツは荷物を持ってさっさとどこかへ行ってしまった。その後姿は、何か急いでおり、イラついているようでもあった。

「どつしちゃったの？アイツ？」

「な。ナツ、大丈夫かなあ……………」

心配するソラとルーシィ。

そんなナツのことをミラが話し出す。

「ナツもね、ロメオ君と一緒にだから。自分とダブっちゃったのかな」

「え？」

「ナツのお父さんもね、出て行ったきり帰ってこないのよ。お父さん行ってても育ての親だけだね……………しかも、ドラゴン」

「「ドラゴン！！？」」

「小さいころドラゴンに森で拾われて、言葉や、文化や、魔法なんかも教えてもらったんだって。でも、ある日そのドラゴンは姿を消した」

「そっか……………」

ソラとルーシィの顔が若干暗くなった。

ミラは再び言葉を紡いで行く

「私達、妖精の尻尾のメンバーはみんな何かを抱えているの。傷や、痛みや、苦しみや……私も」

「え？」

最後の声は聞こえなかったが、顔は切ないものだった。

「うっん、なんでもない」

再び笑顔に戻るミラ。

しかし、どこか無理をしているようなところもあった。

その言葉を聞き、ソラとルーシィは顔を合わせ、ひとつ、決心をした。

「でね？でね？あたし今度ミラさんのところに遊びに行くことになったの」

「下着とか盗んじやだめだよ」

ここはナツたちが乗る馬車の中。

「ってかなんでルーシイたちがいるの？」

「何よ？何か文句ある？」

「そりゃあもう、いろいろと……あい」

本来ナツとハッピーだけだったのだが、ソラたちもそれに乗ってついていくことにしたのだ。

「だってせつかくだから妖精の尻尾の役に立つことをしたいなあーと」

その顔は明らかに何かたくらんだような顔。

その顔を見て全員思ったことだろう。

（絶対株上げる気だ！！）

一方ソラは若干ルーシイに引きながら

「あ、俺はまだ仕事とかいったことないから着いていこうって思っただけ」

とだけ言って置いた。

正直にナツのことが心配でって言えばいいのに、って思ったのは秘密だ。

「それにしても本当にあんたって乗り物だめね。いろいろかわいそう」

「あ？」

ナツはとうとさつきから酔いでダウン状態。こんな様子で大丈夫なのか、と思うほどだ。

「そういえば、マカオさん探すの終わったら私すむところ探さないとなあ」

「オイラとナツんところに住んでもいいよ」

「本気で言ってたらヒゲ引っこ抜くわよ猫ちゃん。ソラがあんな顔で帰って来たんだからいやよ」

あはは、そう談笑しているうちに馬車は止まった。



「止まった!!」

止まった瞬間に復活するナツ

「着いたのかしら?」

そついいながらドアを開けたルーシィ。

「すみませんお客さん。コレ以上は……無理です」

その視界の先で広がるのは

吹雪

「ナニこれ!山のほうとはいえ夏季なんじゃないの!?!」

馬車が降りる面々

「「寒っ！！」」

思わず叫ぶソラとルーシィ

「当たり前だろ？そんな薄着じゃ」

「あんたも一緒じゃない！！」

こんな場所が初仕事かあ……これ無理な気がしてきた……  
ソラがそう思ったのは当然のことかもしれない。

「……………うっ、寒い」

ルーシィはそういいながらナツの布団を体に巻きつけ

「ひひひ開け、時計座の扉ホロロギウム！」

と叫ぶ。そこにいたのは

大きな時計

「おお！！時計だ！！」

そしてルーシィはその時計に入ると

「あたしここにいる」と申しております」

幸せそうな顔で中に座り込んだ。

「あ！ずるいぞ！！自分だけ！」

「何しにきたんだよ」

ナツのナイス突っ込み。

そういえば、とソラが一つナツに聞いた

「何しにきたといえはマカオさんはここに何しにきたんだ？」

「しらねえでついて来たのか？凶悪モンスターバルカンの討伐だ」

バルカン？と首をかしげるソラ。一方ルーシィは驚いたような、な  
んともいえない顔（ホロロギウムの中）で

「あたし帰りたい」と申ししております」

「はいどうぞ、と申ししております」

ソラがルーシィと組むのやめようかな、と思った瞬間だった。  
まだ、コンビ結成3時間だった。

「マカオー！！どこだー！！バルカンにやられちゃったかあ！！」

「マカオさーん！！」

山を探索し始めて15分ほど。バルカンは見る影もなく、マカオの  
姿も見つからない。

すると山の上部のほうから雪塊の崩れる音が！

「危ない！！」

全員が四方によける。

その中心にいたのは白い毛皮のサルのような生物、バルカンが

「バルカンだー!!」

ナツはバルカンの目の前で対峙するように立ったが

「うほっ!!」

バルカンはソレを無視。ナツを飛び越え

「人間の女だ」

ホロロギウムに入るルーシィの元へ。そして

「うほっ」

ホロロギウムごと担いでどこかへ走っていく。  
つて!まずくないか!?!コレ!!

「ナツ!!」

「分かってる。あいつ、しゃべれんのか。行くぞソラー!ハッピー」

「あいやー」

「お、おう!!」

すぐにバルカンのあとを追った。  
その先で

「ってか助けなさいよう!!」と、  
申ししております」と聞こえた  
気がする。

#### 第四話魔法（後書き）

次こそマカオの救出を！！

次は初銭戦闘に入りますね…大丈夫かなあ…

あ、あとやっぱり最初に登場するやつらは黒いアレですよね！（笑）

次回をお楽しみに！！

感想待ってます（笑）

## 第5話力と仲間（前書き）

うん。KHサイドの敵は次の仕事かなあ…エルバー…ハートレス使えるのかなあ？WW



## 第5話力と仲間

あたしの名前はルーシー！17歳の星霊魔導士よ。

あるま街でソラって言う少年とナツと猫（？）に会って憧れの魔導士ギルド、妖精に入ることができたの。

ギルドに入つてすぐ、妖精の尻尾の魔導士の一人が仕事から戻らな  
いって聞いたナツが吹雪の山、ハコベに助けに行つたのね。私は興  
味本位……うん。別に心配なわけじゃない。興味本位でナツについ  
て行つただけど……

「「なんでこんなことになってるのー！！」と、申されましても！  
」

なぜかサル達に囲まれています。

## 第五話仲間と力

「ルーシイ、どこ連れて行かれたんだ？」

「さあなあ……この吹雪じゃ、視界も悪いし……ん？この匂い……！急に出てきた……！」

「分かったのか！？」

「おう！行くぞ……！」

「おう！「あい……！」」

ルーシイが連れ去られてから大体3分ぐらい。ただでさえ視界が悪い吹雪の中白いサルを見つけるのは至難の業だった。なんとかナツが見つけたみたいでそこに向かってます。

「なあ？バルカンってどんなモンスターなんだ？だだのサル？」

ナツ達はともかくソラは何も知らない。この状況で戦ったりするのは困難を極めるだろう。

そんな質問に答えてくれたのはハッピーだった。

「バルカンはね……！」

「バルカンは？」

「最近では珍しい白いサルです!!」

「つまり何も分からないわけだな」

「こんなんで大丈夫なのかなあ……お！ナツがとまってる。着いたのかな？」

ナツは山の中腹にできた少々大きい洞穴の前で止まっていた。ナツの元へ向かい中を覗き込むと……

「ウホ！ウホ！ウホ！ウホ！」

ルーシイの周りを回るサル達。

「助けてえ……」

涙目のルーシイ。

「ったく！やっと追いついたぞ！！マカオは……」

ルーシイの元へ、性格にはバルカンの元へ走っていくナツ

「どこだああああ！うべ！！」

しかし出落ちといふかなんと言つか。足元にあった氷に気づかず転んでしまった。

しかし流石はナツ。この程度じゃなんともない。普通の人間なら既にグロッキーだろう。岩破壊してるし。

「おい！猿！マカオはどこだ！！言葉分かるんだろ！！人間の男だ！！」

「ウホ？男？」

「そーだ！！」

どうやらバルカンは人間の言葉を十分に理解できるようだ。

「マカオをどこに隠した！！」

指を刺し、言い放つナツ

「うわ！隠したって決めつけた！！」

その言葉に突っ込むルーシィ。

「ウホホ？」

しかしつつこんだ後にルーシィは気づく。

”マカオは生きているのか？”

もう3日も帰って来ていないのだ。可能性としてはありえる。なんとしても避けたい状況ではあるが、怪我して動けない、というのは間違いないだろう。  
しかし、バルカンはずつを指で呼び寄せると、

「こつちか？」

ドガツ！！

ナツを山から蹴り落としたのだった。

「おで、男嫌い。女好き」

「「ナツ！！！！」」

ソラとルーシィの音が響き渡る。

「だ、大丈夫だよな？」

「た、たぶん……ったく！ナツが無事じゃなかったらどうしてくれるのよ！！行くわよ、ソラ！」

「おう！」

ナツの仇？をとるため二人はバルカンに襲い掛かる。  
ルーシイは自分の鍵に手を伸ばし、叫ぶ。

「開け！金牛宮の扉！！タウロス！！！」

「MOオーー！」

「「牛！！？」」

今度はバルカンとソラの声が合わさる。  
二人？は顔を見合わせると

「うおー！！」

「ウホ！？」

同時に攻撃を再開した。  
一方ルーシイのほうでは……

「Moo…ルーシイさん今日も相変わらずいい乳してますなあ!!」

「ああ、そういえばこいつもエロだった」

ああ、なんでこう、まじめな奴がいないのかしら？と自分の魔法に疑問を持っている。

ソレを見ていたバルカンは、牛とルーシイに嫉妬…？したのか

「おでの女取るな」

いきなり爆弾発言

ソレに対しタウロスも、

「俺の女？俺の乳と言ってもらおう!!」

「言ってほしくないわよ!!」

爆弾発言

ソレを聞いて真に受けたソラ。

「え！？ルーシイって牛の…!!?」

「ちょっと！あんたまで勘違いしないで!!」

「なんだつまらない」

「つまらないってなによ!!!!」

なんとも緊張感のない空気になってしまった。  
そんなところに来たのは

「よくも落としてくれたなあ」

「「ナツ!」!」

落とされたしまったナツ。ナツは再度洞穴に入り、

「一匹増えてんじゃねーか!」!

タウロス《……》を殴り飛ばした。

「Mou、だめっばいすな……」

タウロス一発KO。

「ちよつとお!」!こいつは味方よお!」!

ルーシイの叫びもむなしく、あっさりタウロスは倒れた。

ああ、もうあたし戦力外じゃない……嘆くルーシイ。基本的に星霊魔導士は1体しか星霊を呼ぶことはできない。さらに呼んだり戻したりするには星霊と魔導士の相互承諾が必要だ。なのでタウロスがこっちに召還されている状態ではルーシイは他の星霊を呼ぶことができないのだ。



「ってか、ナツはどうやって助かったんだ？」

「ん？ハッピーのおかげさ。ありがとな」

「あい！」

ハッピーには翼<sup>キアラ</sup>という魔法があるので飛ぶことができる。しかし重量には限界があるので1回に1人が限界だ。ソラとルーシイは身をもって知っている。

そんな状況を見て、いつの間にか復活していたルーシイは

「あんたって乗り物ダメなのにハッピーは平気なのね」

と。

そしてそれを聞いた全員に

「おまえ、何言ってるんだよ……ハッピーは仲間だろ」

「ルーシイ、今のはひどいぞー！」

「おいら、もう立ち直れないー！」

全力で引かれていた。

「ウホ！！！！」

完全に無視されて怒ったのか、バルカンは全力でこちらに走ってきた。

「なあ。ルーシィ、いいか？妖精の尻尾のメンバーは全員仲間だ」

ナツはそれに気づいているのか、気づいていないのか、話を続ける。

「じっちゃんも、ミラも」

「ナツ！後ろ！！」

さすがに危ないと判断したのか、ルーシィが叫ぶ。

「うぜえ奴らだが 그레이 や エルフマン も」

「わかった！わかったから後ろ向いて！！」

もう、バルカンとの距離は攻撃圏内だ。

このままでは危ない！！

そう思っ て 飛び出そうとした ソラ だったが、ナツの顔を見て、やめた。

その顔は何か満ち溢れていて、安心できる顔だ。

「ハッピーもルーシィも、ソラも、みんな仲間だ」

「だから！俺はマカオをつれてかえるんだ！！！」

完全に死角から襲い掛かってきていたバルカンを吹き飛ばし、

「早くマカオの場所いわねえと黒焦げになるぞ？」

挑発した。

その言葉を聞いて、ルーシイは実感した。

ナツは本当に、誰よりも妖精このキルトの尻尾を大事にしているんだと。

ナツとバルカンの戦いをソラは部屋の端っこで見っていた。  
素直な感想は

すごいな

だった。

ソラはまだ誰かのために、あそこまで戦ったことはない。

だからナツの戦い方には

「憧れるなあ……」

「いつくぞー……」

バルカンの怒涛の攻撃を意図も簡単に防ぎ、よけて、カウンターを入れて、ナツは最後の締めにかかろうとしていた。

「火竜の鉄拳……！」

火を纏った拳をバルカンに打ちつけ、バルカンをKOさせてしまった。

「ねえ、マカオさんの場所聞くんじゃなかったの？」

「おわ！そうだった！」

「完全に気絶しちゃってるな」

バルカンは完全に気を失っている。マカオへの情報源は完全に消え

てしまった。バルカンが目を覚ますまで待たなくてはならない。それがいつになるか……

そう、思った瞬間

≡≡≡≡≡≡≡……

バルカンの体が光り始めた。

「な、何だあ!?!」

全員がバルカンのほうを向く。とそこには

「猿がマカオになった!?!」

「「ええ!?!?!」」

なんとバルカンがマカオの姿に変形したのだ。

「テイクオーバー 接收だ!?!」

「テイクオーバー 接收?」

「体をのつとる魔法だよ!?!」

そんなものもあるのか!?!そう、思った矢先、

グラッと、マカオの体が揺れ、

「わああああ!!」

洞穴の外へと落ちようとしていた。

ナツがマカオの足をつかみ、ハッピーがそのナツを支える。

「二人は無理だよー!!」

しかしハッピーに二人も持ち上げる力はない

「あきらめんな!!」

そこに食いついたのはソラとルーシィ。

しかし、女一人と14歳の子供。大人の体重二人分を持ち上げることなどできない

「もつ……無理……!!」

全員の手が落ちる！そう思った瞬間

「M O オ大丈夫ですぞ」

復活したタウロスによって救出された。

「出欠がひどい！！応急セットじゃ間に合わない！！」

「テイクオーバー 接收される前に相当争ったみたいだね」

「わき腹の傷が……」

「マカオ！しっかりしろよ！！」

全員によって引き上げられたマカオの傷は相当のものだった。体中は傷だらけ、寒い中にいたせいで体も冷えている。これでは本格的に危ない。

「くっそ……どうするー！！」

悩む全員。

そしてナツが無言で

火のついた手をわき腹に押し付けた

「グワアアアアア!!」

あまりの痛さにうめくマカオ

「ちよつと何やって……」

ルーシイはそこまで言って気づく。この方法なら止血になると。

「死ぬんじゃないねえ!!ロメオがまってるんだろ!!」

ナツの言葉か、それとも痛さによって目を覚ましたのか。マカオがゆっくり話し出した。

「くそ、情けねえな……19匹は、倒し……たんだ。最後の1匹に接テイク収オバされて……」

「馬鹿やろっ!しゃべるんじゃないねえ!!傷口が開くだろ!!」

19匹!!??

ソラとルーシイはその言葉を聞いて、絶句する。



魔導士の仕事をなめていた、と。

楽しくやれるものだと思っていた。しかしそんなことは間違いだった。もちろん楽しくできるだろうが、それ以前に『命』がかかっている。命がなくなればその楽しさも味わえないのだ。

二人は今日のことを決して忘れないと決意した。

町に戻ると、街の入り口には少年、ロメオの姿が。

「父ちゃん、ごめん」

そもそもこうなったのはロメオの責任でもあった。

マカオが一人で無茶な仕事へ出たのは、街の子供達に妖精の尻尾のことを馬鹿にされたロメオが腹を立てて

「父ちゃんすっごい仕事いつてきてよ！おれ、このままじゃ悔しいよ……」

といったのが原因だったのだ。

「心配かけたな……」

しかしそんなロメオを咎めもせず、マカオはロメオに抱きついた  
そしてニカッと笑うと

「今度、クソガキ共に言われたらいつてやれ。お前の父ちゃんは怪物19匹倒せるのかってなよ!!」

そうだったのだ。

無言で立ち去ろうとするナツたちにロメオは

「ありがとー!!ナツ兄!!ハッピー!!」

「それと、ルーシィ姉とソラ兄も!!」

そう叫んだのだった。

「そういえば、ナツはあの吹雪の中どうやってルーシィの場所分かったんだ?」

「ん？においがしたんだよ」

「どんな？」

「ルーシィの脇の匂い」

「……………」

その後ナツはルーシィとお話したそうだ。

## 第5話力と仲間（後書き）

オチすみません。

今回はソラの気持ちに重点を置いてみました（笑）

まあ、こんな感じになっちゃいますね。結局ソラの戦闘なかったW  
本当はここでハートレス出そうと思ったけど……

出る要素なくね！！？と気づいてしまいW W

でわでわ、次回もお楽しみに！！

感想など待ってます！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7481x/>

---

FAIRY TAIL 鍵の物語

2011年10月25日01時06分発行